

## 企業共催セミナー④

# がん疼痛に対する オピオイド鎮痛薬の使い分け

2022年 9月10日 [土] 13:00 ~ 14:00

Live配信  
開催

座長

中川 貴之 先生

京都大学医学部附属病院薬剤部  
准教授/副薬剤部長

演者

川股 知之 先生

和歌山県立医科大学医学部麻酔科学教室 教授

がん患者の症状の中で痛みはQOLに大きな影響を与えるため、疼痛対策はがん患者ケアの基本であり、その中心となるのがWHO方式がん疼痛治療法である。我が国では、2002年からの緩和ケア診療加算開始と2007年のがん対策基本法の施行とそれに伴う緩和ケア診療・教育の充実がWHO方式がん疼痛治療法を急速に普及させた。当時のWHO方式がん疼痛治療法では、“鎮痛薬使用の5原則”が提示されており、その中で最も象徴的な事項が“3段階除痛ラダー”ではなかっただろうか。疼痛管理に精通していない医療者もモルヒネ、オキシコドン、およびフェンタニルの薬理学的特徴を理解していれば、ラダーに沿って鎮痛薬を選択でき、疼痛管理の均てん化に寄与したように感じられる。

それから20年経過し、我が国では多種多様なオピオイド製剤を使用することが可能となった。軽度から中等度の痛みを使用するいわゆる“弱オピオイド”として、トラマドールが加わり、高度の痛みを使用する“強オピオイド”には、ヒドロモルフォン、メサドン、タペンタドールが加わった。薬物の種類だけでなく、剤型も豊富になった。さらに、2018年にWHO方式がん疼痛治療法が“WHO guidelines for the pharmacological and radiotherapeutic management of cancer pain in adults and adolescents”として改訂された。大きな変化の1つが“3段階除痛ラダー”が“鎮痛薬使用の5原則”から削除され、限られた薬剤を有効に使用するための教育ツールとされたことである。“3段階除痛ラダー”は概略的なものではあったが、疼痛管理に精通していない医療者がオピオイド選択する際の指針としての役割を果たしていたと思われる。“3段階除痛ラダー”が削除されたことにより、オピオイドを処方する医療者や指導者にはこれまで以上に、患者の疼痛評価とそれに適したオピオイド鎮痛薬の選択の知識が求められる。

本セミナーでは、オピオイド鎮痛薬の使い分けについて解説する。その中で、最近選択の幅が広まったいわゆる“弱オピオイド”についても注目したい。

※ご視聴は8月22日までに参加登録された方のみとなります。  
あらかじめご了承ください。



第41回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム  
ホームページ  
<https://web.apollon.nta.co.jp/jnrc2022/index.html>